

「注文の多い料理店」の読み方

この物語を一読したときの子どもたちの反応は、ほぼ次のようになる。

【授業記録】

T どう思った、みんな。

C 鈍感

C 間が抜けてる

C まぬけ

C ぼけ

ほなみ まぬけやなあ

伝美 山猫が食べようと思って言ってる

ことを全部普通のことと考えている。

都志 普通さあ、そんなのおかしいって

気づくものやのに

まゆき ふつう、家でもこんなに廊下はないやろ

男洋 むりやり納得している。

T ほう、男洋君、どこで感じた？

男洋 牛乳とか酢かけるところ

T どう思った？翼。三の場面

翼 まぬけや。

布小5年の子どもたちの初めの感想(H17)

どうしてこんなに鈍感でまぬけなの？「紳士」なのに。

※紳士=上流社会の男子。人柄が立派で礼儀正しい男の人

「しんし」の実像は、物語の冒頭で書かれている

二人の若いしんしが、すっかリイギリスの兵隊の形
をして、ぴかぴかする鉄ぼうをかついで、白くまの
ような犬を二ひき連れて



Tこの二人の紳士は、今までにも何度も猟に来ているのだろうか？それとも初めてなのだろうか？

C初めてや！

Tそれは、どこを読んだらわかるの？

井野 何でもかまわないから早くタンタアーンとやってみたいもんだなあ」って、初めてやから早く撃ってみたいんや。

Cぴかぴかする鉄砲」ってまっさらやん。使ったことないの。

富永 案内してきた専門の鉄砲打ち」って何も知らないから連れてきている

C だいたいぶの山奥」って山のことを知らないんや。

ゆめか ずいぶん痛快だろうねえ」って、撃ったことないからわくわくしてるんやと思う

二人の若いしんし

すっかりイギリスの兵隊の形をして、
ぴかぴかする鉄ぼうをかついで、
白くまのような犬を二ひき連れて

「せんたい、ここの山はけしからんね。
鳥もけものも一ぴきもいやがらん。
なんでもかまわないから、早くタンタ
アーンと、やってみたいもんだなあ。」

「ついにぼくは、二千四百円の損害だ
ぼくは二千八百円の損害だ。」

「なあにもどりに、昨日の宿屋で、山鳥
を十円も買って帰ればいい。」

「つたぎもでていたねえ。そうすれば
結局おんなじだった。」

成金上がりのエセ紳士

だからだまされていく(オレオレ詐欺と同じ)

二人の「エセ紳士」ぶりを読んでいく

※ 刑事「ロンボ」のパターン



RESTAURANT
西洋料理店
WILDCAT HOUSE
山猫軒

なかなか開けてるんだ

げんかんは白い瀬戸のれんがで組んで、実にりっぱなもんです。
ガラスの開き戸に金文字で

どうも変なうちだ。

「これはロシア式だ。」

こんな山の中

東京の大きな料理屋だって大通りには少ないだろう。」

かみ・はきもののどろを

作法のきびしい家だ。きつとよほどえらい人たちが、たびたび来るんだ。」

鉄ぼうとたまを

よほどえらい人が始終来ているんだ。」

つぼの中のクリーム

よほどえらい人が来ている。貴族とちかづきになるかもしれない。」

すっかりイギリスの兵隊の形をして、
ぴかぴかする鉄ぼうをかついで、
白くまのような犬を二ひき連れて



一ぺん紙くずのようになった二人の顔だけは、東京
に帰っても、お湯にはいっても、もう元のとおりにな
おりませんでした。

【宮澤賢治自注】

糧にとぼしい村のこどもらが、都会文明と放恣
な階級とに対するやむにやまれない反感です

物語文における「確かな読みの力」とは、

全体がどんな形で構成されているか
紳士の気持ちはどこで変化したか

などと、作品を外側から、分析的に解説できる力なのだろうか？

「物語文を確かに読み取る」とは

「叙述をとおして作品の世界に立ち会う」こと